

〔能楽〕 研究展望(昭和51・52年)

西野, 春雄

(出版者 / Publisher)

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University /
野上記念法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Nogaku kenkyu : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 :
能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

171

(終了ページ / End Page)

181

(発行年 / Year)

1978-07-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020280>

研究展望（昭和51・52年）

西野春雄

はじめに

能と狂言に関する出版は、ここ数年一種のブームの感がある。

五十一年・五十二年もこの状況は変りなく、実に種々様々な出版物が刊行された。たとえば、小林責氏の『狂言をたのしむ』^{平凡社カラー新書}（51年2月）のような、狂言の魅力や狂言界の現況などを新鮮な視点で多角的に探った、秀れた啓蒙書があるかと思えば、書名は挙げないが誤謬と偏見の多い入門書も出ている。さらに、畑健氏『狂言の装束―素襦と肩衣―』（紫紅社 51年7月、四五〇〇円）や柴田実氏監修『壬生狂言』（学芸書林 51年12月、五八〇〇円）のような、数万円もする図録的な豪華本なども少なくない。

一方、雑誌「太陽」が表章氏の監修で「能・世阿弥の生涯」^{平凡社}（51年3月）を特集し、観世宗家所蔵の世阿弥自筆本『花伝第六花修』の全部と、『花伝第七別紙口伝』の一部がカラーで紹介された。「第六花修」の全葉カラーによる公開は初めてである。焼損の甚しい「第七別紙口伝」の朱筆部分が鮮明にうつし出されているのも驚異的なことで、ほかに世阿弥自筆書状や能本、金春禅竹書写の『二曲三体人形図』もほぼ全部がカラーで収められるなど、資

料的にも有益な特集であった。

さて、学界に眼を転ずると、能も狂言も、ここ数年着実に成果をあげつつある。一昨年あたりから、能楽論書の校注、謡曲・狂言の本文の校訂や影印、能楽史料集の刊行といった研究活動の基礎となる仕事が続けられており、五十一年・五十二年は、特に狂言関係の貴重資料の影印が目立った。また、学会誌・研究誌・商業誌その他に夥しい論文が発表され、「論文の洪水」状況をなしているが、そのなかでは能も狂言も含めて歴史的研究にいくつかの注目すべき論考があったように思う。また、研究者と役者双方の共同作業の成果として、狂言の技法による「自然居士」の上演は特筆すべき実験であったし（東京国立文化財研究所芸能部主催、52年12月）、「鴻山文庫」受贈記念の「能の講演と能楽資料展」（能楽研究所主催、52年10月）も大掛りな展示であった。

以下、五十一年と五十二年の二年間の研究活動を、単行本や論文の紹介を中核としながら概観してみることにするが、網羅主義はとらないという本欄の基本方針に従い、私が示唆を受けた諸論考を中心に重点的にとりあげることにしたい。なお、私の怠慢から重要な論著や論考を見落しているおそれも十分あり、漏脱等の少なくないことを、あらかじめお断りしておく。

〔単行本〕(刊行順)

『狂言六義』下・抜書『天理図書館善本叢書』(北川忠彦解題。八木書店 51年1月、四五〇頁・二五八頁、一〇八〇〇円)

天理本の名で親しまれている和泉流最古の台本の複製本。50年12月に刊行された「上」に続き、ここに完結した。書写は寛永ごろの和泉流二代山脇元永(道意)かと推測されており、中世から近世にかけての狂言の生成・発展の過程をたどる上に欠かせない基本資料である。「上」と「抜書」の冒頭の口絵(カラー写真)は朱の色も鮮やかによく原姿を再現しており、他の部分も読み易い形に影印されている。北川氏の解題は、(一)狂言の歴史と和泉流の成立、(二)天理本『狂言六義』、(三)流動と固定、(四)当代芸能から古典芸能へ、(五)その他の問題、の五項目から成るが、狂言史の視野の中に天理本を位置づけておられ、池田広司氏の『古狂言』台本の発達に關する書誌的研究(風間書房 昭42)と共に必読すべき文献といえよう。検索に便利なる曲名索引もついている。

『大藏家 古本能狂言』(大藏弥太郎編。臨川書店 51年3月、全六冊、九四〇〇円)

虎明本の名で知られる、寛永十九年大藏虎明書写の大藏流古台本で大藏弥太郎氏所蔵。戦時中(昭18~19年)にコロタイプ版で刊行された笹野堅編『古本能狂言集』(岩波書店 全五冊)に、未公開の新資料『眞傳集』を加えた新しい複製である。墨色の黒に加えて朱筆部分も鮮やかに印刷されており、版面も大きく読みやすい。岩波版が入手困難な折から、値段は張るものの、まことに時宜を

得た出版である。ひとり狂言のみならず広く能楽史研究に役立つ資料が多く、ちなみに『眞傳集』に収められている装束付は、寛永十八年豊島作右衛門筆『能出立之次第』(彰考館蔵)や江戸初期筆『宗随古型付』(鴻山文庫蔵)と同じ内容である。寛永十二年から翌年にかけて大藏弥太郎虎時(後の弥右衛門虎明)が書写した「間之本」(五冊)は間狂言の貴重資料であり、「聞書并笛集」は演出史を知る好資料でもある。

『新作能縁起』(土岐善磨著。光風社書店 51年6月、二四八頁、三五〇〇円)

三十数年来、喜多実氏の協力を得て「夢殿」をはじめとする新作能を次々と発表してこられた著者の大成版ともいべき書である。「夢殿」「頭如」「青衣女人」「実朝」「秀衡」「四面楚歌」「鶴」「使徒パウロ」「親鸞」「復活」「鑑真和上」「綾鼓」の十二曲の、詞章と解題、それに能楽の進展に関する論考を収める。仏寺関係の史伝説によった作品が多く、それらは仏教的理念に基づいて書かれているが、ときに難解な漢語や仏語に出会う。こうした傾向は、学僧を父に持つ著者の環境と関連するのであろう。かつてのローマ字運動などに見る平明さは消え、従来の能作の手法に依拠した点もあるが、しかし、在来曲にはかつてない新鮮な感覚の感じられる「夢殿」や「青衣女人」は、世阿弥の線をのぼりつめた昭和の能として高く評価されている。隅々まで神経の行き届いた文辞は歌人である著者一流のものであり、世阿弥のいう「種・作・書」でいえば、土岐氏は「書」の作者であるともいわれている。節付は別として、われわれは作者自身による解題付きの定本を手にすることができた。

52年6月8日で満九十三歳を迎えられた著者は、日本歌壇史上、鎌倉時代の藤原俊成（九十歳）、近代の佐佐木信綱（九十一歳）を凌ぐ長命であられる。

『中世評論集』鑑賞日本古典文学（島津忠夫・福田秀一・伊藤正義編）。角川書店 51年6月、四四二頁、一五〇〇円）

歌論・連歌論・能楽論から成るが、能楽論の部に『風姿花伝』の第三問答条々までが収められている。伊藤正義氏の校訂・校注。冒頭の総論は、数多くの問題を含む『風姿花伝』の成立論に絞り、諸本とその伝本を詳述するが、花伝の複雑な成立事情がわかりやすく説かれている。本文は、日本思想大系『世阿弥・禅竹』（岩波書店 昭49）などによって今日の世阿弥能楽論研究をリードしている表章氏の仕事が、五巻本（第五奥義までを有する諸本）の原本を応永後期に世阿弥自身が改定した本と想定し、五巻本のうちの最善本とされる金春本を底本とする校訂方針であるのに対し、伊藤氏は五巻本の同一祖本に書写者の意志がかなり入っていると見ておられる。「花伝は、とりわけ第五までについては、誤脱・改竄を含む転写本ばかりであって、十分信頼できる伝本を持たないのである。比較的善本と目されている金春本にしても、その事情は変わらない」とし、その結果「花伝本文を世阿弥のそれに近づけるためには、結局は、校訂本文を作らざるを得ないのである。かかる立場から、本書においては、底本を定めることをせず、諸本校合とそれに批判を加えるかたちで本文を作られた。おおよその方針は、①吉田本・宗節奥書本・金春本のいずれか一本のみに異同がある本で校訂して本文を定め、②三本とも異同のない場合

でも、四巻本を参考にして、本文をきめた場合もある、という立場に立つ。したがって伊藤氏の制定した本文は、諸本に精通する氏が、綿密な読みによって把握された世阿弥の用字・用語法、文体、思考の型などを含めた総合的判断による独自の本文となった。『校批判』↓「狭き批判」、「利すべし」↓「疾くすべし」などの本文改変説が提起され、従来の校訂本との段落のきり方や解釈のずれ、成立順に対する新見もあり、脚注・口訳・鑑賞も創見に満ち、あらたな問題を投げかける。たとえば、これまで非常に難解で諸説入り乱れている問答条々の「位の論」についての見解などもその一つであろう。世阿弥の後継者である禅竹の能楽論をも視野に入れ、禅竹を通して世阿弥を照らす試みも成功している。巻末には、観世寿夫氏のエッセイ「幽玄な美と芸」があり、幽玄と長を生得のものとする見解は伊藤氏の「位の論」と一致し、おもしろい。ほかに竹本幹夫氏「世阿弥能楽論の形成」、堀口康生氏「世子六十以後申楽談儀」の論考もあり、参考文献も付す。

『未刊謡曲集』二十六・二十七・二十八『田中允編。古典文庫 二五三頁・二五一頁・二四四頁、会員頒布。51年7月・11月・52年6月）

旧仙台藩主伊達家蔵「伊達本番外謡曲」五百六番の中、未刊曲五百五番を五十音順に並べ、各曲に解題を付して翻印紹介しているもので、第二冊から第四冊までが刊行された。二十六集は「相坂うかれ女」から「銀猫西行」までの七六番、二十七集は「くさかり忠度」から「志渡寺」までの七五番、二十八集は「自然仏石」から「ちよづるひめ」までの七四番。「近世調の駄作」が多くなってきた感

が深く、本文以上に、著者多年の番外曲研究を集大成した『謡曲解題』の刊行を切に待望したい。

『下間少進集』Ⅲ（片桐登校訂。わんや書店 51年8月、二六二頁、会員頒価二一〇〇円）

法政大学能楽研究所編能楽資料集成の第六冊。①叢伝抄、②能之留帳、③起請文帖、④下間少進書状の四種を収め、解説は下間少進の経歴と収載書目の解題を載せ、巻末に『下間少進集』のⅠからⅢまでに収めた伝書の曲名・人名・能楽関係語句索引を付す。①を除き未翻印の資料であり②は能勢朝次氏『能楽源流考』の「演能曲目調査資料」に慶長七年まで利用されている、既刊のⅠⅡあわせて、室町末期から江戸初期にいたる能楽史研究に大いに役立つであろう。

『世阿弥芸術論』新潮日本古典集成（田中裕校注。新潮社 51年9月、三〇六頁、一五〇〇円）

世阿弥伝書のうちから代表的なものとして『風姿花伝』『至花道』『花鏡』『九位』『世子六十以後申楽談儀』の五種を選んでおられるが、『申楽談儀』が収録されたのは特筆すべきことだろう。校訂はこのシリーズの特色として読み易さを旨としてなされているが、頭注や傍注（セピア色）に独得の読みが施されており、とくに、「書手」^{かきて}「為手」^{して}「見手」^{みて}から成る能の荷い手のうちでも、「見手」（観客側）の視点を大きく取りあげられた点に多くの示唆を受けた。表現論的視野に立った解説も、短かくはあるが、重要な問題を提起する。

『狂言辞典事項編』（古川久・小林責・荻原達子編。東京堂出版 51年12月、四二〇頁、六八〇〇円）

刊行までに約二十年の歳月を閲した労作である。編者の一人古川氏は昭和三十八年に『狂言辞典語彙編』を出版しておられるが、われわれは今また新たな専門辞典の恩恵に浴することができた。廃曲も含む狂言全曲（七四八曲）、演者、演出用語、文献などを解説した総合事典で、狂言は、上演記録や名寄せなどによって中世以降の流伝の状況を記し、筋立ての解説は一流に偏せず、諸台本も調査されて、流派による相異も明示しつつ簡潔に記述し、狂言師についても（室町時代から現在活躍中の人物まで）、初めてまとまった解説がなされている。なお、編者は続刊として「文献編」を予定しておられる。

『芸能・能芸』三弥井選書（徳江元正著。三弥井書店 51年12月 二八八頁、一二〇〇円）

中世芸能史の構築をめざす著者が、これまでに諸誌に発表された論考を手際よくまとめた、すこぶる刺激的な本である。文献資料と民俗資料とを交錯させつつ広い視野に立って追究しようとする氏は、能を採りあげる場合でも、対象へ深く斬りこむと同時に、常にその周辺の芸能へ目をくばることを忘れず、しかも芸能のジャンルの枠を越えて、説話・伝承・民俗・宗教・美術・地理・歴史など、時間的にも空間的にも広い視座から追究されている。

『狂言論考—説話からの形成とその展開—』三弥井選書（田口和夫著。三弥井書店 52年2月、三四七頁、一四〇〇円）

これまで諸誌に発表された諸論考に、大幅増補や削減等を施して一書にまとめた本で、「説話から狂言へ」という副題に示されたとおり、説話から狂言への形成とその後の狂言における展開を論

じている。たとえば、「磁石」「悪太郎」「人馬」などの狂言が説話から形成されたことを説き、出典を明らかにし、さらに説話が狂言の形成にどのようなかかわったかを問う。「太郎冠者」や「すっぱ」に中世的人間像を見、それが鎌倉時代における「おろわく誑惑の法師」の系譜にあることなどを考察される。いづれの章も読みごたえがある。

「驚流狂言伝書 萬聞書」(古川久・永井猛校訂。わんや書店 52年3月、二六六頁、会員頒価二一〇〇円)

能楽資料集成の第七冊。驚伝右衛門派の高弟名女川辰三郎が書写した狂言伝書群(宝暦名女川本と仮称)の中の一冊で、書名のとおり多岐にわたり、書上・名寄せの類、諸家の系図、狂言の演技上の心得その他、有用と思われることどもを書き留めたものである。書写は宝暦ごろと想定されるが、一代以前以前の文書を多く写しており、江戸中期の能楽関係資料の集成といった感が深い。とくに、現存最古の書上である「明暦三年驚伝右衛門書上」などの重要記事、「享保九年四座一流書上」など、能楽全般にわたる歴史的研究の資料として貴重な内容をもっている。解説も、成立事情、各記事について注意すべき点、他書との系統調査など詳細で、写真や巻末の索引も便利である。今後は宝暦名女川本の全容の翻刻紹介が待たれる。

『能本説と展開』(小林責・増田正造・羽田昶編。桜楓社 52年3月、二二九頁、一八〇〇円)

大学での中世文学・演劇学・比較文学などの教材として編まれた。謡曲本文を中段に据え、上段を典拠となった作品(本説)、下

段を後代文芸への影響(展開)とし、「井筒」以下一三曲と昭和後期の新作能二種を収める。レイアウトがうまく、見易い形で入っており、手頃なテキストである。なお、世阿弥が「作り能」を三流以下に置いていたとする「まえがき」の一文は編者の誤解であろう。

『能と狂言』(金井清光著。明治書院 52年8月、六六八頁、一〇〇〇円)

「狂言役者を神に扮することのできない猿楽役者である」と考えることにより、神に扮することのできる能役者との身分的相違を明確にし、狂言研究に新しい突破口を開いた」と自らいわれる著者が、文学や芸能を生み出した人間、そのものに視点を置き、能と狂言の本質的な相違点や類似点を追究する。能の作品研究二十曲をも収める。

『地方狂言の研究』(宮尾しげを著。檜書店 52年2月、三八五頁、四八〇〇円)

各地方に伝承されている狂言台本を精力的に採集調査している著者が、これまで「観世」に発表したものを中心に集めたもの。廃絶状態にある地方狂言もすくなくないので、十九個所の資料を載せる「研究資料篇」は貴重である。

『謡曲・狂言』(鑑賞日本古典文学(小山弘志・北川忠彦編著。角川書店 52年9月、五四〇頁、一五〇〇円)

謡曲を小山氏が、狂言を北川氏が担当し、脚注・口訳つきの「本文鑑賞」の部分と、多彩な執筆者による「謡曲・狂言の窓」とから成る。謡曲は手際よい総説と、七曲という制限のなかで、五番立ての各部にわたりつつ作者や作品傾向も展望できるように最善の配慮

がなされており、鶴亀・忠度(金春)、野宮(宝生)、自然居士(喜多)、隅田川・恋重荷(観世)、船弁慶(金剛)の選曲が光っている。小見出しを施した論説部分も、夢幻能の成立・作者の特色など多岐にわたり、口訳もこなれている。狂言は、狂言の流派のなかでも喜劇的誇張の目立つ茂山千五郎家の台本に拠り、七曲を収め、狂言の作劇法を巧みに摘出して見せる。諸本の解題などを載せる解説も簡潔。諸家の論考は、観阿弥・世阿弥の世界(戸井田道三氏)、世阿弥以後の作者たち(西野春雄)、間狂言の変遷(表章氏)、能の面(中村保雄氏)、狂言について(田口和夫氏)、狂言のことでば・謡曲のことでば(寿岳章子氏)、狂言と中世史研究(横井清氏)、英語世界における謡曲(田代慶一郎氏)の八篇。他に茨木憲氏(能・狂言と現代劇)と生島遼一氏(能と親しむ)のエッセイに、簡潔にまとめた参考文献(橋本朝生・幕内エイ子両氏)を付す。

〔論文、その他〕

五十一・二年は歴史的研究に見るべきものがあり、教えられる点も多かった。その第一は、表章氏「大和猿楽の「長」の性格の変遷上・下」(能楽研究二・三号、51年2月・52年3月)であろう。(1)大和猿楽四座で、一座の統率者・代表者であったらしい長(オサ)と呼ばれる存在が、(2)室町中期には奈良での特定の神事猿楽・式三番の「翁」を勤める者の意に変わり、(3)それが江戸期には権守(ゴンノカミ)と呼ばれ、(4)明治以降には座の解体もあって消滅するに至った歴史の変遷を、史資料を博搜して考察された未踏の論文である。表氏は「長の性格や名称の変遷の背後には、猿楽が呪術的芸能から諸人快樂のための演劇に脱皮する過程での重要な側面

が隠されているように思われる」と展望し、第一節室町期の「長」では、この論考の出発点となった「観世座ノ長十二大夫」の問題をめぐって、室町期の長の性格を考察し、第二節江戸期の「権守」と室町期の「長」では、江戸時代の年預と権守の実態を明らかにし、江戸期の権守が室町期の長の後身であることを論証された。「上」は第二節の途中まで。「中」は、第三節で室町時代に戻って長の性格の変遷の背景、長・権守をめぐる諸問題を考察される。次々に究明されていく諸事実、研究方法、論証の筋道など、迫力ある論文は、方法論の上でも啓発される点が多かった。

なお、翁猿楽の芸態と歴史を考察された山路興造氏「翁猿楽異考」(芸能史研究55号、51年10月)も右と重り合う部分もある。

片桐登氏「江戸初期素人猿楽考」(「役者目録」を中心に) (能楽研究三号、52年3月)は、室町末期から江戸初期にかけて活躍した「手猿楽」(素人役者)を中心に、その出自・経歴・芸系等を考証したもので、氏が手がけてきた一連の論考の総決算ともいうべき手堅い論考。対象は室町末から寛永までの約八十年間。「役者目録」を中心にその他の史資料を博搜して、一人一人を照射していく。

伊藤正義氏「堀池」―手猿楽とその周辺(金剛99号、52年5月)は、手猿楽・堀池宗叱父子について、その事蹟を中心に考察し、さらに宗活節付本しか知られていなかった堀池本に、新資料・宗叱節付本の存在を紹介し、堀池と近衛家との関係や、折本仕立て・紺紙金銀泥表紙など特異な装訂についても論及されている。

なお、「金剛」には「京都金剛史」として「京都南陽舎番組」が前西芳雄氏によって連載されていたが、第一冊が十一回(99号)で完結

した。前西氏は精力的に番組その他の演能記録を調査しておられ、「御内々御能ニ付太夫役付帳」―江戸後期禁裏御能―上・中」（芸能史研究57・59号 52年4・10月）を發表、禁裏御所の経理部にあたる勘使所が明和九年九月より文久元年九月までの九十年間にわたって、禁裏御所での演能を曲ごとに記録した控えを翻刻紹介し（上）、さらに宮内庁書陵部蔵その他の資料を参照しつつ、全八九二番（外に囃子三番）の演能を、それぞれの年月に集めている（中）。これも貴重な労作である。未完。

竹本幹夫氏「琳阿考―南北朝期曲舞作者の横顔―」（芸能史研究53号 51年4月）は、世阿弥以前、能の作詞が専門の猿楽師でない素人の手に委ねられていたらしい時期に活躍した連歌師琳阿（曲舞作者玉林）について、その作品と事蹟が能の歴史に高い位置を占めるとし、「玉林の、能及びそれ以外の分野での活動ぶりを紹介して玉林をとりまく文化的背景を明らかにし、併せてその作風を世阿弥以前の作詞技術の一般的傾向との関り合いの中で」考察し、世阿弥以前の能作者のあり方を推測している。

永井猛氏の「『宝曆名女川本』について下」（観世51年10・11月）は、新資料たる三宅襄氏旧蔵檜常太郎氏蔵の鷲流狂言伝書（宝曆名女川本と仮称）の調査に始まり、これがかつて笹野堅氏が紹介された「名女川本」と一具のものであることを考証し、編者を名女川家五代の辰三郎と推定される。ついで名女川家・鷲伝右衛門家の歴代に及び、鷲保教本は享保元年から九年までの間に書かれたとする。論証の手堅さからみてもこの推定は恐らく動くまい。大蔵・和泉両流に比べ、やや不振の鷲流研究を一步前進させた論考

であった。

関屋俊彦氏の「和泉流家系考―狂言師山脇和泉をめぐって―」（芸能史研究55号 51年10月）は、和泉流宗家山脇和泉歴代に関する基礎的研究であり、貴重な労作である。演能資料を調査され、寛永八年から嘉永四年に至る歴代の出演記録一覧表を付しており、次は野村又三郎家ほかを含む和泉流全体にわたる考察が期待される。

次に、いろいろな試みがなされ、着実に成果をあげつつある作品研究をみてみよう。①作品の素材とその背景の考察（狂言では特に説話から芸能へという路線の追究が盛ん）、②詞章・小段構造の分析検討、③演出面・音楽面の分析、④作者の考定、⑤演能記録その他の演能史の調査、⑥享受の歴史と他芸能への影響の考察等々、問題意識も研究方法も多様であり、狂言研究もいまや作品研究の時代に入ったとさえいわれている。

能では、雑誌「観世」が昭和四十年一月の表章氏「求塚」からほぼ隔月に作品研究を特集し、力を注いできているが、五十一年は、伊藤正義氏「東北」（1月）、加美宏氏「忠度」（3月）、西野春雄「雲雀山」（5月）、小田幸子氏「身延」（7月）、竹本幹夫氏「雨月」（9月）、表章氏「柏崎」（11月）の六曲がとりあげられたが、右の中では「柏崎」の改作問題を考証した表氏の論考が印象強かった。「申楽談儀」の一節の解釈から世阿弥自筆能本「柏崎」の検討に進み、「土車」||原「柏崎」説など、世阿弥による改訂作業について示唆に富む新見を提示された。手堅い方法とその成果は、今後の作品研究の一指標となる。

「観世」ではそのほか中村格氏「井筒」の主題と「幽玄」（4月）、

天野文雄氏「逆髪誕生」(12月)が載ったが、説話から芸能への路線を追究されている天野氏の論が特に面白かった。氏の論は、徳江元正氏編『謡曲五番』(桜楓社 51年4月、一九三頁、一八〇〇円)の研究篇に収められた解説(特に「関寺小町」とつながるものである。同書は大学での教科書用として編まれたもの(影印)。

短い、興味深い論考を載せる『鏡仙』(鏡仙会発行)の「研究・十二月往来」は五十一年は左の論考を掲載した。田口和夫氏「狂言の鬼の遡源」(1月)、外村久江氏「能のなかの早歌」(2月)、おもてあきら氏「世阿弥の幼名(鬼夜叉)と竹田権兵衛広貞」(3月)、堀口康生氏「近世戯謡考(三)―仮名草子「酒茶論」の場合―」(4月)、橋本朝生氏「鷲という狂言と鷲流」(7月)、西野春雄「いろは作者注文の異本」(10月)、竹本幹夫氏「東寺百合文書の琳阿弥について」(12月)の六篇。このなかでは外村氏の論が能の構想や作能法と関連して示唆深く、また近年福田秀一氏によって明らかにされた「世阿弥幼名鬼夜叉説」について、すでに近世加賀藩の能大夫・竹田権兵衛家の三代広貞によって唱えられていた事実を考証した、おもて氏の論も興味深かった。

五十二年は、おもてあきら氏「一条竹鼻勸進猿楽」(1月)、田口和夫氏「棒縛―中世の狂言と鷲流」(2月)、外村南都子氏「熊野」と早歌「熊野参詣」(3月)前西芳雄氏「竹田権兵衛勸進能」(4月)、竹本幹夫氏「祝言謡」と謡故実」(9月)、西野春雄「定家」をめぐって(「明星定家」のことなど)「(10月)を載せている。

徳江元正・小林健二氏が「金剛」(97号。51年10月から)連載している「謡曲雑考」は、「葵上」以下一曲一曲の素材・構想・背景な

どを、説話と謡曲との相関性という視点に立って考察しており、限られたスペースの中に有益な問題を提起している。ずっと続けてもらいたい試みである。徳江氏はまた「班女」余響(国語と国文学52年5月号)を発表され、室町の史資料を駆使して「班女」の素材・異名のいわれ、構想・詞章その他「班女」をめぐる諸問題を次々に展開させ、広い視野の中で「班女」をとらえている。

黒田正男氏「世阿弥時代の能と『三国伝記』」(宮城教育大学紀要第11巻別冊。52年3月)は、著者が「世阿弥自筆本『阿古屋松』と『三国伝記』」(同。第8巻)で指摘された、世阿弥時代の能と『三国伝記』の説話世界との関係をさらに進めたもので、①素材における共通性、②構想における等質性、③表現様式における類似、④能「熊坂」の「愛着慈悲心は達多が五逆にすぐれ」の意味と「三国伝記」の四点について論じておられる。単なる出典考証にとどまらず、構想・表現様式などからも『三国伝記』説話と能の近親性を説き、④は従来の諸注に対し、魅力的な新見を提示する。黒田氏は謡曲研究ばかりでなく、世阿弥の能楽論研究の面でもすぐれた業績を残しておられるが、五十二年十二月に亡くなられた。学恩に感謝すると共に御冥福をお祈り申しあげる。

山木ユリ氏「荒れたる美」とその演劇的成立」(日本文学 52年5月)は副題に「芭蕉」「定家」「姥捨」と禅竹の様式」とあるように、この三曲を中心に禅竹の能の美とその様式を考察したものが、禅竹の能には「完全であると同時に未完である円環構造」の様式がみられるとされる。作品を深く読みこんだ鋭い指摘であり、大事な視点だと思う。ただ「姥捨」には異論もあろう。

天野文雄氏「『善界』の本地」(観世 52年5月)は、竹田法印定盛という素人の作った「善界」の人気を博している理由について、『是善坊絵巻』・天狗説話の展開・鬼能と天狗物などの視点から考察している。

味方健氏「幽玄序説―世阿弥・幽玄再考―」(立命館文学379~381号。52年3月)は、情趣的・唯美的な把握と、祭祀的・礼樂的な把握とを、幽玄を支える二本の軸とされ、ついで『音曲口伝』『五音曲』の所説と具体的な作品の検討を通して音曲における幽玄(ならびに幽曲)の位相を考えておられる。

他に月曜会発行の「能研究と評論」(6号 51年7月)が作品研究を特集している。鳥居明雄氏「『黒塚』寛書」、大場滋氏「能本『難波梅』雑考」、和田エイ子氏「敦盛」のクセと源氏寄合、小田幸子氏「碎動風鬼の能―三道の例曲を中心に―」、片桐登氏「廢曲『狭衣』メモ」の五編。それぞれ独自の視点をもつ論考だが、短篇であることが惜しまれるものが少なくない。右のうち、世阿弥の鬼能について関心を寄せている私自身の興味とも関連して、小田氏の論文を興味深く読んだ。また、世阿弥の脚本論「種・作・書」のうち、従来比較的触れられることの少なかった「書」について、具体的な問題提起をされた和田氏の論考も短いがおもしろい。

「解釈と鑑賞」(52年2月)が「世阿弥能の美学」を特集し、諸家の論考を載せている。同誌の能の特集は昭和三十三年十月以来のことで、その間の研究の進展ぶりが伺われる。他の特集でもそうだが、研究者以外の論考を載せるのはいいとしても、単に著名人をならべ、短文の一文を載せるなどして全体にサービス過剰

気味ともいえる姿勢が少し気になる。掲載論文の中では、奥野純一氏「世阿弥の教養の源泉」がおもしろく、さりげなく触れているが、『五音』の(葛の袴)の「作者但眼」を「但(シ)眼」と連歌一字名のごとく読み、眼阿を比定されたくだりなど看過しえない指摘だ。竹本幹夫氏作成の「世阿弥の軌跡」と題する要領のいい年表も役に立とう。

狂言関係の作品研究では、林屋辰三郎・北川忠彦・堀口康生氏の『天正狂言本』をめぐって(芸能史研究52号 51年1月)が示唆に富む。共同研究の成果を国文学・国語学・歴史学の三方面から報告されたもので、林屋氏「近世『咄』への道」は天正本の咄本的性格を論じ、北川氏の「廢曲の意味するもの」は中世から近世へかけての狂言の整備を説き、堀口氏「音韻表記の立場から」は国語学的考察による古態演出の復元を試みておられるが、とくに堀口氏による天正本の新解釈が興味深い。これまで誤写・誤記とされていたものが、そうではなくて天正本の性格による必然の表記だったとする視点は重要な指摘であろう。国語学の側との相互乗入れが活発になることを期待したい。

北川忠彦氏「狂言の忘我性」(山辺道20号 51年3月)は、狂言の登場人物の基本的性格に「忘我性(そぞろくさま)」が認められるとし、それが庶民のものであり、中世後期に特に顕著であること、その解明こそ中世における「非幽玄」の要素を明らかにすることになると結ぶ。この視点は、同氏「狂言研究―国語国文学研究の戦後三十年―」(文学・語学76号 51年4月)でも力説されているが、こうした提言も含めて「狂言研究」は研究史の発展とその動向が的確

に把握されており、恰好の研究手引といえる。田口和夫氏「狂言の鬼―瓜盗人から―」(芸能 51年3月)も興味深く読んだ。狂言に登場する鬼で、もっとも数の多い閻魔王に代表される地獄の鬼をとりあげ、その位置と意味を狂言以前の地獄の鬼と比較しつつ考察されたもの。

尾形叡氏「狂言を通して見た初期俳諧」(中世文学論叢 51年7月)は、「連歌隆盛の時運の中から、俳諧が独立した一つのジャンルとして成立してくる過程の具体的様相については、今日なお不明の点が少ない」とし、その解明への手掛りとして連歌や俳諧を素材とした狂言の存在を論じ、狂言の古台本を検討しつつ『犬筑波』との関連を探り、「連歌史の蔭に埋もれた十六世紀の俳諧の発掘にとって、狂言の伝えるところは、もっとも注目される必要があるであろう」との重要な問題を提起しておられる。

「能研究と評論」(7号 52年8月)は「江戸初期の狂言」を特集し、橋本朝生氏「独狂言をめぐる」、永井猛氏「大小」と『狸腹鼓』、池田晃一氏「江戸初期の狂言界―激能記録よりみて―」の三篇を載せる。

橋本・永井両論文は作品を通して当時の群小狂言の様相や特質を論じ、池田論文は上演記録等から当時の狂言上演の状況を説く。それぞれ力作であるが、三篇の中では着想の良さを示す永井論文、歴大な資料を整理し考察した池田論文がおもしろかった。

小林貢氏「近代の狂言師たち二〇〇〃三八」(能楽タイムズ 51年2月 52年12月)は明治から大正期にかけて地味な活動をした狂言師たちをとりあげ、人物評伝ともいべき論考である。前年に続き藤江又喜・先代又三郎の和泉流の狂言師をとりあげ、52年は大蔵流

に進み、山本東・二世山本東次郎をとりあげている。未完。

次に音楽的研究について述べよう。能の研究で最も立ち遅れているのが音楽面の研究であるが、ここ数年、少しずつではあるが興味深い論考が出はじめている。そのいくつかを紹介すると、観世流シテ方で西洋音楽の理論にも詳しい浅見真高氏の「再び能の音楽性に関して」(観世 51年1月6月)は、能の音楽を音階論と拍子論の二方面から考察された長文の論考。実技者としての経験を根柢に、豊富な実例や図表を多用して説いている。小島英幸氏は「ツヨ吟の発生―ヨウ吟本落しの導入―」(観世 51年6月)と「ツヨ吟とヨウ吟の特性」(同 52年4月)「ツヨ吟の発生時期」(同 11月)と続けて発表された。ほかに伝書と、伝書既出曲が使用している囃子事の双方から一つ一つの囃子事の消長を考察した八嶋正治氏「禅鳳以前の囃子事をめぐって」(宝生 51年4月5月7月8月)、中世芸能で使用されている楽器の構成を調べ、日本人の音楽感覚を歴史的に捉えようとした、奥山けい子氏「中世芸能の囃子」(芸能 51年5月6月)などがある。

一方、横道萬里雄氏の「江口平調返のあらまし」(鏡仙240号 51年1月)は、故観世華雪十七回忌追善能のパンフレットに寄せられた論考であるが、パンフレット全頁をその解明にあてた読みごたえのあるもので、秘事故実のやかましい囃子事の典型を、わかりやすく鮮やかに分析されている。必読文献である。そのほか、能・狂言の音楽的特質の解明を中心としながら、広く日本中世音楽の歴史を概観した横道萬里雄・松本雍氏の「日本音楽の歴史をたどる―中世篇二―四」(季刊邦楽6号8号。51年1月4月7月)もある。

最後に、これまで触れなかった論考その他を紹介しておこう。

単行本では、田井庄之助氏『中世芸能の研究』(桜楓社 51年9月)が刊行され、西一祥氏『世阿弥研究』(同上51年11月)も再版された。本田安次博士古稀記念会編『芸能論纂』(錦正社 51年3月)には能楽関係の論考もあり、竹本幹夫氏『東岳院様能楽余香解説』(米沢金剛会51年9月)は演出史研究に役立つ。木村三四五氏『業餘稿叢』(私家版51年3月)には、「二条宴乗記」「時慶卿記」(自筆本、天正十五年記)など芸能史研究にも有益な史料が入っており、伏見稲荷大社編『稻荷大社由緒記集成教化著作篇』(51年1月)には稲荷関係の謡曲を三点翻刻。『峯村文人先生退官記念論集』(52年3月)にも能および芸能関係の論考がある。西洋古典劇と能の比較研究をも収める新関良三氏『演劇論文集』(東京堂出版 52年6月)は興味深く、新川哲雄氏『人間世阿弥』(芸立出版 52年7月)は世阿弥の生涯と作品を跡づける。また野上豊一郎『能—二百四十番—』(能楽書林 52年11月)が復刻され、研究者必携の国語国文学研究史大成8『謡曲・狂言』が増補文献目録を加えて再版されたことも特筆しておこう(三省堂 52年12月)。

論文では、能楽論と武道伝書相互の影響関係を考察された表章氏の「能楽と武道」(武道15年1~8月)がめずらしく、同氏「薪猿楽の変遷」(観世52年7・8月)も室町初期から江戸期にわたる薪猿楽の変遷を簡明にあとづけている。「宝生」掲載の香西精氏の「世子参究」は、「すわる」(51年9月)「坐断」(52年1月)「下居」(同10月)を発表、毎回、鋭い語感と的確な考証で教えられることが多い。資料紹介的なものでは、片桐登氏「慶長二年宝生座

支配之事」(宝生25年2月)、古川久氏『武江年表』と能楽」(宝生52年5~7月)もある。翻刻では、田中允氏「翻刻古版本間狂言(四)」(青山語文6 51年3月)が完結し、小林賢章氏「翻刻『寛永四十年刊学謡集』」(青須我波良13 51年11月)、中村格氏「宗随本古型付の研究(三)―考察と本文―」(東京学芸大学紀要28 51年10月)、西野春雄「藤田家蔵『古今稀能集』」(芸能史研究53号 51年4月)などがある。

なお例により、五十一・五十二年中に刊行された古記録類で、能楽史研究に役立つと思われるものを刊行順に列挙しておこう。

〔五十一年〕

『妙法院史料第一巻』堯恕法親王日記一 自寛文三年九月 至延宝四年十二月 吉川弘文館 3月

大日本古記録『建内記七』 自文安元年四月 至同四年閏二月 岩波書店 3月

史料纂集『義演准后日記第一』 自文禄五年正月 至慶長三年九月 続群書類従完成会 5月

史料纂集『本源自性院記』 自元和七年正月 至寛永二十年十一月 同 7月

〔五十二年〕

『妙法院史料第二巻』堯恕法親王日記二 自延宝五年正月 至貞享四年十二月 吉川弘文館 3月

大日本古記録『言経卿記十』 自慶長四年七月 至同五年十二月 岩波書店 3月

日本庶民文化史料集成第十三巻・芸能記録(一)『宴遊日記』 自安永二年正月 7月

至天明四年十二月 三一書房 7月

同集成第十二巻・芸能記録(一)『松平大和守日記』 自明暦四年四月 至元禄八年正月 10月

三一書房